（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	青木　三陽
論文題目	『パルツィヴァール』とドイツ中世盛期の宮廷文化		

（論文内容の要旨）

本博士学位申請論文は、ドイツ中世盛期（12,13世紀）の宮廷叙事詩を代表するヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルツィヴァール』と、当時の世俗文化の発展との関連を明らかにしようとするものである。概して、宮廷社会において新しく創作された宮廷文学は、「12世紀ルネサンス」に再活性化したキリスト教的ラテン文化の影響を受けて成立したものであるが、しかし宮廷時代盛期の13世紀初期に作られたこの作品は、当時の他の宮廷叙事詩人達のそれとは異なって、宮廷時代初期の文学へと後退した観がある。ヴォルフラムは、キリスト教的ラテン文化を規範とする当時の詩作傾向から一定の距離を置き、むしろ古い英雄叙事詩や武勲詩の要素をこの作品に取り込んでいるからである。しかし、それを徹底することはせず、初め英雄主義的な騎士を描いたが、後に新しい理念にかなう徳操高き騎士を登場させている。また彼は、初め学識がなく文盲で、自己の作品は原典に依拠していないと告白したが、後に学識をにおわせながら原典に代わる数種の情報源を提示する。従来の『パルツィヴァール』研究はこのような飛躍・矛盾に混乱したが、申請者はむしろ、首尾一貫しないと見える詩人の特異性に着目し、その要因を中世盛期に発展した新たな俗人文化との関連から明らかにしようとする。それを目的として本論文は四つの章から構成されている。

第一章では、当時の世俗社会で急速な発展を遂げた文字文化と宮廷文学との関連について考察し、ヴォルフラムの特異な「学識」と「書物」の両概念が、いかなる意味を有しているのかについて論じている。当時の宮廷叙事詩人達は、自己の作品をそれ以前の文芸と明確に区別するために、物語の原典として依拠すべき「書物」を挙げ、更にそれを吟味し決定できる深い「学識」が自己に備わっていることを誇った。それに対してヴォルフラムは、初めに『パルツィヴァール』が書物に拠らない物語であると断言し、それと同時に自らの文盲をも告白する。そのように明言したにもかかわらず、詩人は他の宮廷叙事詩人達との区別を徹底せず、後に物語の正当性を保証してくれる人物を持ち出す。更に自己の文盲を補うかのように、登場する世俗の人達に文字を読み書きする能力を付与し、聖杯に浮かび上がる神の言葉を読み取らせる。即ち彼らは賦与された能力によって、教会を仲介することなく神の言葉を直接理解することが可能になった。それまで教会に占有されてきた文字の文化を俗人が獲得し、それを基に新たな世俗文化の自立をはかろうとするヴォルフラムの意図を明らかにするために、申請者は「学識」と「書物」にまつわる数多の描写を丹念に検討している。

第二章では、作品中に宮廷時代初期および盛期の異なった形態の

騎士が克明に描かれていることに関して、このような騎士像の変遷に込められた意味を論じている。描かれている騎士像は、初め宮廷時代初期の北方蛮族的な英雄主義の名残を見せていたが、登場人物の世代交代とともに、宮廷作法や徳操の新たな騎士理念が次第にそれに加わっていった。最後にそれは世俗宮廷の理想にかなう新しい騎士像へと発展を遂げ、主人公パルツィヴァールに体現される。このような発展を強く意識して作られたこの作品は、西欧社会が経験した騎士概念の歴史的発展を再確認するものであり、更に騎士階級がになう新興の俗人文化の自立を意図しているものであると、申請者は結論づけている。

第三章では、この作品の原典に言及したそれぞれの箇所を緻密に考察し、当時の宮廷文学の規範的詩学と世俗詩人のフィクション意識との関係について論じている。古い英雄叙事詩や武勲詩の基礎をなす民族的、集団的記憶に拠らず、それでもなお歴史文学であることを主張しようとする宮廷叙事詩にとって、物語の真実性を保証する手段は、典拠となる書物を明確に示すことであった。しかるにヴォルフラムは他の宮廷叙事詩人達とは異なって、書物を典拠とする代わりに、共有知識・口承の報告・天文学・歴史記述等を情報源とすることで、物語の真実性を保証する。このように次元を異にする情報源を統合することによって、従来の宮廷叙事詩とは異なった物語世界を可能にすることができること、即ち新しい文学の可能性を俗人文化にもたらすことができることを、申請者は指摘している。

第四章では、かつての英雄叙事詩や武勲詩に登場した異教徒と彼らが住まう東洋が、宮廷叙事詩であるこの作品に再登場する意味を、文学史に密接に関連させて論じている。ヴォルフラムが描く異教徒はインドをも含む東洋全土に住まうが、その多くはさながら古い英雄叙事詩や武勲詩を想起させるような場面で登場する。それにもかかわらず異教徒は、不気味な存在としてではなくキリスト教徒に劣らぬ好ましい姿、即ち憧憬と尊敬の対象として描かれている。このように詩人は、かつてのステレオタイプな異教徒像と東洋像を敢えて想起させ、新旧の文学間に生じる相違に注目させる。詩人のこのような特異な手法を深く考察することによって、申請者は、教会の思想的支配から脱して創りあげた新しい文学の誕生と発展を、特に印象づけようとするのがヴォルフラムの意図であることを明らかにしている。

以上のように本論文は、『パルツィヴァール』を同時代の文学から際立たせている特異性を指摘し、それについて独自の見解を示しつつ、その要因を中世盛期に発展した新たな俗人文化との関連から解明している。

（論文審査の結果の要旨）

　本博士学位申請論文は、ドイツ中世盛期の卓越した詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの代表的宮廷叙事詩『パルツィヴァール』と、「12世紀ルネサンス」と称される当時の世俗文化の発展との関連性を明らかにしようとするものである。西欧では、高い知名度を誇るこの作品は今でも盛んに研究されているが、わが国では、中世高地ドイツ語の極めて難解な表現と文献学上の困難さゆえに、その研究状況は盛んであるとは言い難い。このような状況の下で、ドイツ語圏における膨大な研究資料を渉猟・整理して最新の研究動向をわが国に伝え、それと同時に世俗文化の発展に関連させて作品を緻密に分析し、問題となる詩人の際立った特異性を解明した本論文は、高い評価を受けるに値する。更に、社会背景の正確な理解によって、新たな世俗文化を形成する源となった時代精神の一端を明らかにしようとする研究姿勢は、積極的に新しい研究分野を開拓し、将来の包括的な研究に繋がるものとして大いに期待できる。各章についての具体的な評価は、以下のとおりである。
　第一章においては、何故に当時の他の宮廷叙事詩人達が自らの「学識」を標榜し、物語の典拠と言うべき「書物」に言及したのかを明らかにしつつ、両概念にまつわるヴォルフラムの特異な文言が、いかなる意味を有しているのかを詳しく論じている。詩人は初め、この作品には依拠すべき書物は無く、しかも自分は文盲であると明言しながら、後にそれを覆すような発言をしていることが、研究者達の間で従来不可解な点とされてきた。文盲から学識へ、そして書物から多様な情報源への移行を、申請者は単なる矛盾と解さず、それまで教会に占有されていた文字の文化を俗人が獲得し、それを基に新たな世俗文化の自立をはかろうとする詩人の意図を表すものであり、聖職者らのラテン的キリスト教文化に対する世俗文化の自立性の主張であると解した。このように理解することによって、申請者は作品全体を一貫した論理のもとで説明することに成功している。
　第二章においては、まず西欧中世における騎士概念一般の歴史的変遷について概観し、続いてこの作品に描かれた文学的騎士像の変化を検討している。作品では、宮廷時代初期の特性を帯びた騎士像と、新しい理念に基づいた騎士像とが混在しているが、それらは次第に理想的騎士像へと集約され、主人公パルツィヴァールに体現される。申請者はこの一連の描写を、西欧社会で生じた騎士概念の歴史的変化と関連づけて考察し、騎士階級がになう新興の世俗文化を自立させようとする詩人の意図を、強い説得力をもって明らかにしている。この点は少なからず評価されてよい。
　第三章においては、物語の典拠についての保証が「書物」の権威によってではなく、次元を異にする多様な情報源によって与えられていることを指摘し、そのことがいかなる意味を有しているのかについて詳しく論じている。ともすれば場当たり的に提示されたと思われがちなこれらの情報源は、従来の『パルツィヴァール』研究に

おいて大きな混乱を招いてきた。本章ではこれらの情報源の分析に、共同体意識構築の場としての宮廷文学という視点を持ち込み、混乱の解消を試みている。ヴォルフラムは宮廷叙事詩という文学をいわば世俗の共同体内での会話に変え、俗人の文学活動の自主性を受容者との共同体的行為の中に見出そうとする。そこでは旧来の「書物」を保証にせず、新しく次元の異なる多様な情報源を作品に投入し、そのことによって新たな世俗文学の可能性を開いたとする申請者の主張は、斬新であり特筆すべきものである。

第四章においては、宮廷叙事詩であるこの作品に「異教徒」と「東洋」が取り入れられている意味を、作品と文学史の関わりの中で丹念に読み解いている。過去の暗い異教徒像は、無知から出た偏見と教会側の当為の原理に従って定義づけされたものであり、古い英雄叙事詩や武勲詩は異教徒をそのようなものとして取り入れた。しかるに『パルツィヴァール』では後に異教徒を憧憬と尊敬の対象として描き、旧文学との比較を誘導することによって宮廷文学の歴史的発展を示していると、申請者は鋭く指摘する。また、教会の思想的支配から脱した新しい俗語文学の誕生と発展を印象づけようとするのが、そこでの詩人の意図であると主張する分析力と洞察力は、高い評価を受けるに値する。

以上のように本論文は、同時代の文学に対する『パルツィヴァール』の特異性に着目し、その要因を中世盛期に発展した新たな世俗文化との関連から解明することに成功している。従来なされている研究では、主人公の罪やグラール（聖杯）等の作品内容、クレチアンやキオート等の原拠、あるいは文体・表現・構成等の作品形式に関するものがそのほとんどを占めている。しかし、本論文のように、かくのごとく難解な作品と時代精神との関係にまで肉薄した壮大な試みは数少ない。そのような試みであるがゆえに散見される荒削りな部分を修正することや、中世高地ドイツ語のテクストを更にいっそう厳密に読めるようになること等が課題として残るが、この論文が膨大な数の研究資料を参照・整理し、斬新な視点から大きな成果をあげた労作であることは、疑いようがない。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと判定される。また平成22年７月１日、論文内容とそれに関連する事項に関して口頭試問を行った結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日：　　　　　年　　　月　　　日以降